

Web 公開用

日本教授学習心理学会  
第 18 回年会プログラム  
(第 3 号通信)

2022 年 6 月 25 日・26 日

東京都市大学

日本教授学習心理学会  
第18回年会の開催にあたって

日本教授学習心理学会第18回年会準備委員長  
渡邊 大輔（東京都市大学）

会員の皆様におかれましては、新型コロナウイルスの災禍により、気の休まることのない日々をお過ごしのことと拝察いたします。

さて、昨年度にひきつづき実施形態の制約はございますが、皆さまのお力添えのおかげで、年会を開催できる運びとなりました。充実した研究交流の場をご提供できるよう努力いたします。皆様のお越しを心よりお待ちしております。

オンライン開催による様々なお願いにつきましては、本通信をご覧くださいますようお願い申し上げます。

2022年6月上旬

日本教授学習心理学会第18回年会準備委員会  
委員長 渡邊 大輔（東京都市大学）  
準備委員 梶原 郁郎（山梨大学）  
小林 寛子（東京未来大学）  
大道 一弘（大正大学）

【I】日程表

	9	10	11	12	13	14	15	16	17
1 日 目	9:00 開場	9:30~12:00 個人発表1（4件） 個人発表2（4件）		12:15 ~13:15 編集 委員会	13:30~15:30 研究企画		15:45 ~16:45 会 総務会		
	9:00 開場	9:30~12:00 個人発表3（4件） 個人発表4（4件）		13:00~16:00 個人発表5（5件）					

## 【Ⅱ】会期・開催方法・アクセス方法

### (1) 会期

2022年6月25日(土)・26日(日)の2日間

### (2) 開催方法

Zoom ミーティングを使用した完全オンライン

### (3) アクセス方法

当日のミーティング情報は、以下の Web サイトに掲載いたします。

URL または QR コードからアクセスして、ミーティング ID・パスコードをご確認ください。

Web サイトではミーティング情報のほか、資料の提供等も行います。

### 第18回年会 Web サイト

《URL は郵送される第3号通信をご覧ください。参加申し込みをされた方は、メールでもご確認くださいませ。》

この Web サイトは限定公開となっております。第三者に URL を公開しないでください。

## 【Ⅲ】オンライン開催にあたってのお願い

### (1) 参加時の表示名

「お名前（ご所属）」の表記をお願いいたします。

### (2) マイクの取り扱い

マイクをミュートに設定してください。

### (3) アクセス情報について

上記 Web サイトの URL 及び Web サイトに掲載の情報は、限定公開です。第三者に公開しないようご注意ください。

### (4) 録画について

研究企画では記録のために録画を行います。公開はいたしません。マイクの音声は録音されますので、ご了承ください。

### (5) チャットの取り扱い

質問は、挙手の上、司会者の指示をお待ちください。

チャットの利用は、技術的なトラブル対応のみにとどめてください。

## 【IV】発表者の方へ

### ① 事前の接続テストについて

今回の年会では Zoom ミーティングを使用します。資料の共有等をご自身の PC で画面共有により行っていただきます。事前の接続テストの日程を以下の通り設定いたしましたので、操作等に不安のある方は、参加いただくことを推奨いたします。

#### (1) 日時

2022 年 6 月 21 日(火) 18 時～20 時

2022 年 6 月 22 日(水) 15 時～18 時

※ 上記時間帯に参加が難しい場合等、上記以外の時間帯を希望される場合は、事前に準備委員会までご相談ください。

#### (2) アクセス方法

事前接続テストのミーティング情報は、第 18 回年会 Web サイトに掲載します。

### ② 当日配布資料の取り扱いについて【重要】

当日配布予定の資料がある場合は、6 月 22 日(水)までに以下の通りご提出ください。 第 18 回年会 Web サイト上に掲載いたします。

#### (1) 締め切り日

2022 年 6 月 22 日(水) (厳守)

※ 締め切り日を過ぎた時点でアクセスができなくなります。

上記は、誤操作による削除を防ぐための対応です。

#### (2) 提出方法

以下の Google ドライブ 共有フォルダ内に用意された、ご自身の「お名前：発表タイトル」のフォルダにアップロードしてください。

提出に際して問題が発生した場合は、お早めに準備委員会までご連絡ください。

#### JAPTL 第 18 回年会 当日配布資料 提出ボックス

《URL は郵送される第 3 号通信をご覧ください。参加申し込みをされた方は、メールでもご確認いただけます。》

#### (3) 提出ファイル形式

PDF 形式でご提出ください。

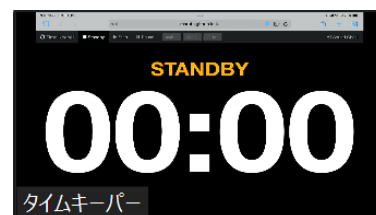
## 【V】発表時の時間管理について（発表者の方へ）

Zoom ミーティング上の「タイムキーパー」が表示する時間表示を基準にお願いいたします。

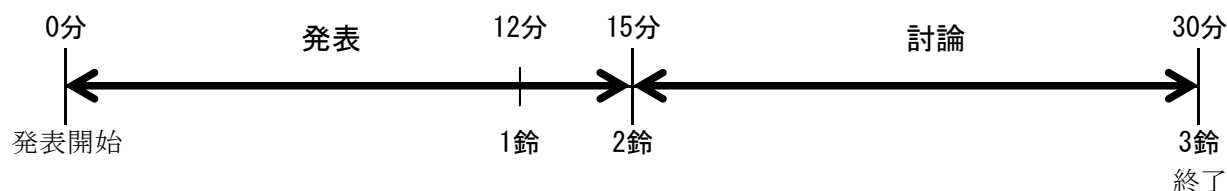
タイムキーパーが、

- ① 12分（1 鈴：発表終了3 分前）
- ② 15分（2 鈴：発表終了・討論開始）
- ③ 30分（3 鈴：討論終了）

のタイミングでベルを鳴らします。



時間表示イメージ



## 【VI】連絡先

日本教授学習心理学会第 18 回年会準備委員会が学会の企画・運営にあたっております。ご連絡は下記までお願いいたします。

[住所] 〒158-8557 東京都世田谷区玉堤 1-28-1

東京都市大学 共通教育部 教職教育部門 渡邊大輔

[Email] japtl2022★gmail.com ※ ★を@に変えてください

[電話] 050-3561-7826

連絡はできる限り電子メールでお願いいたします

**【Ⅶ】個人発表スケジュール**

<b>個人発表 1 (6月25日/9:30~12:00)</b>		
<b>司会：立木徹 (茨城キリスト教大学名誉教授)・白井秀明 (東北福祉大学)</b>		
舩田弘子	札幌学院大学	大学生の問題解決に及ぼす講義情報の影響 —判断理由に見る「一見, 正答」の問題点—
佐藤誠子	石巻専修大学	条件づけ判断における自己完結的推論をいかにして脱却するか —「あいまい事例」を用いた条件づけの授業実践—
宮田佳緒里	兵庫教育大学	単元密着型の児童生徒イメージカードの導入が教職大学院における模擬授業に及ぼす効果
○橘 春菜	名古屋大学	授業内容のまとめ志向と批判的思考態度との関連
#藤村宣之	東京大学	—定型問題と非定型問題に着目して—

<b>個人発表 2 (6月25日/9:30~12:00)</b>		
<b>司会：作間慎一 (玉川大学名誉教授)・黒岩督 (大和大学)</b>		
王 曄雯	九州大学大学院	中国語を母語とする日本語学習者の熟語習得状況に関する調査
梶原郁郎	山梨大学	「おおきなかぶ」(小学1年)の授業内容の構想 —一定番解釈「協力」に代わるもうひとつの全体解釈—
劫野大志	兵庫教育大学 大学院	文学作品の「読みの更新」を目指した授業実践研究(1) — 「盆土産」の「謎解き読み」を手掛かりに—
寺田正嗣	九州大学大学院	読書の柔軟性を高めるトレーニングの効果に関する予備的調査

<b>個人発表 3 (6月26日/9:30~12:00)</b>		
<b>司会：斎藤裕 (新潟県立大学)・平真木夫 (宮城教育大学)</b>		
馬場達也	九州大学大学院	整形外科患者の持つ誤認識に関する調査
下司裕樹	九州大学大学院	大学生を対象とした社会科の授業実践研究 —歴史的思考力の育成を目標として—
○目黒裕子	宮城教育大学附 属小学校	学びの連続性を意識した授業展開
平真木夫	宮城教育大学	
千葉聡一郎	宮城県大崎市立 三本木小学校	遊びと学力の関係 —休み時間の遊び方と学ぶ意欲について—

個人発表 4 (6月26日/9:30~12:00)		
司会：梶原郁郎 (山梨大学)・佐藤誠子 (石巻専修大学)		
○吉國秀人	兵庫教育大学	児童の角度概念の変容を目指した授業実践研究
#加藤久恵	兵庫教育大学	—小学4年算数のリフレクション授業を通して—
#川瀬直広	兵庫教育大学附 属小学校	
蛭名正司	会津大学	割合の非加法性に関する理解調査 —中学1年生を対象として—
小林寛子	東京未来大学	割合についての理解と割合文章題解決との関連
大道一弘	大正大学	構成法を特徴づける「構成素同定アプローチ」 —研究アプローチからみた「構成法」の現代的再評価—

個人発表 5 (6月26日/13:00~16:00)		
司会：荒井龍弥 (仙台大学)・吉國秀人 (兵庫教育大学)		
斎藤 裕	新潟県立大学	「質量保存の法則」・「アルキメデスの原理(浮力)」・「密度」, 3者の理解とその関係に関する調査研究
渡邊大輔	東京都市大学	授業書「ものとその重さ」による諸教授理論(高村・細谷) の再検討 —ロモノソフの「物質不滅の法則」による教育内 容論の見地から—
小野耕一	仙台市宮城野区 中央市民センタ ー	代入操作発問が弾性ルールの適用に及ぼす効果
工藤与志文	東北大学	大学生の仮説発見的推論に及ぼす「知識操作」教授の効果
○進藤聡彦	放送大学	ルールの2つの機能の理解
工藤与志文	東北大学	
佐藤誠子	石巻専修大学	

## 【Ⅶ】研究企画

### 教授学習心理学研究の対象と方法

—細谷純から何を学び、学問として何をどう成立させるか—

本企画では、教授学習心理学が目指してきた方向性をより深く知るとともに、研究のあり方を見直し、学問発展の契機を見出すものとした。

企画：渡邊大輔（東京都市大学）・大道一弘（大正大学） 司会：梶原郁郎（山梨大学）

話題提供者 1：宇野忍先生（東北大学名誉教授） 学会の設立と文書作成の歴史的経緯

話題提供者 2：工藤与志文先生（東北大学教授） ルール・システムの重視とは何か

指定討論者：進藤聡彦先生（放送大学教授・山梨大学名誉教授）

#### 課題設定の趣旨

本学会における「設立趣旨書」「教育実践上の強い問題意識」には、教育目標の実現に向けて、教師の視座を持ち、学習者の変化の確認による効果の検証が掲げられている。当たり前としか思えない方法論だが、このように強調して書かねばならない事情があったのだろう。これはおそらく「授業に学び、授業を創る」のは、学問とみなされていないか、実現させる難しさによるものだろう。本学会の存在意義、学問の固有性、研究対象や方法は、究極的にはこの点に関わると思われる。

教授学習心理学とは何か。「設立趣意書」における「決意」によれば「1）…学習につまずいている学習者たちを援助して一定の行動の獲得を可能にするという教育目標を実現するための研究活動を積極的に行う」とある。これは明らかに「ル・バー修正研究」である。むろん、それ以外の研究もあるだろうが、「決意」の「第一」にこのような限定がなされた点に注目したい。

学会の意義や文書の価値は、どういう歴史的課題やアンチテーゼの中から生まれたのか、それが必要とされた歴史を通して深く理解されはざである。

そこで本企画の第一として、本学会の創設に関わり、中心的役割を果たしてこられた宇野忍先生に、学史的な解説をお願いした。歴史的な経緯を通じて、文書に込められた理念や概念を深く理解し、学問の歩み—過去・現在・未来—を考える基準座標を得たい。

#### 細谷純の本質をどう見るか

概念としての「ル・バー (ru)」は、細谷純によって提案された。細谷の研究は「一人の学習者」「一人の教師」として「子どもともに高いレベルの科学を育てる」姿勢に貫かれており、「教育心理学だからこそしなければ」というものではなかった。それゆえ「ル・バー」は「授業に学び、授業を創る」過程で発生した「概念」として、それを作り出した人間による授業研究の内実にも則して検討されなければならない。

細谷らによる「理科ノート方式」は、科学的概念の形成と授業研究の科学化を意図して作られた「最初のもの」である。「仮説的な目標系列を具体的に作る」という形で、教授仮説としての教育内容・教材の構成と実験的授業による検証が試みられた。これは仮説実験授業研究会における「授業書」や極地方式研究会の「テキスト」の成立に直接影響を与えると同時に、授業研究の具体的成果に基づいて「ドヒャー型」「ジワジワ型」のような魅力的な「概念」を抽象化した。

ただし、理科ノート方式では、力の概念形成に十分な成果を上げられなかった。その後の細谷が自覚



したように「一学習者」としての細谷の学力に限界があったからである。この限界は「理科教育の心理学研究では、自然科学の基本法則を把握しない限り、子どもの心理を正しくとらえ、発展させることは不可能である（高橋金三郎）」との見解に教えられ、「わたしの中に科学を育て」「何を教えたいか」を考え抜くことによって克服される。こうして、テキスト「世界の気候」「地質学第一歩」などの歴史的成果を生み出すとともに、「変形と力」におけるフックの法則とボイルの法則の統一的把握など、新しい教育内容・カリキュラムの提案を含んだ画期的認識を提示したのである。細谷は、「通常の教育心理学」の枠組にとらわれず、「是が非でも教えたいもの」を自らの中に構築することによって、「科学と教育の結合」という教育学研究の中心的課題に具体的に回答した。授業づくりの当事者として自然科学の理解を深め、ル・バー修正のみならず、ru の拡張、ru の適用限界（例外例 $\overline{eg}$ ）の把握による「新しい ru」へ発展の道筋を具体的に創り出した点に細谷純の本質があると思われる。

### ルール・システムの重視とは何か

「ru による新しい ru」という論点は、単なる ru の羅列とは次元の異なる「適用範囲の広い ru」の構築によって展開される。これは「ルール・システム」（細谷 1976）「（教科学習の特徴が）学習素材が相互に system としてまとめあげる可能性を内包」（細谷 1977；2001）との記述に対応する。

しかし、教授学習心理学における議論の多くは、教育学一般における議論と同様に、（学習者以前の）自然そのものの内的連関、自然科学の論理構造についての言及に乏しいように思われる。例えば、古典力学は、電磁気学や熱力学の基礎となりえるだけでなく、原子・分子のような微視的領域に「適用できない」ことを教える点でも適用範囲が広い。後者は「誤った一般化」であるが、これは普遍法則と確信していた古典力学を微視的領域に適用して失敗し、しかも膨大な失敗を重ねて、その適用範囲（限界）を見出し、区別と連関において量子力学を建設した。このように自然にはたらきかけて自然の内的連関を明らかにしてきたのが自然科学であり人間の認識の歩みだとすれば、対象の論理構造や科学的視点を欠いた「システム」の検討はありえない。教育学や心理学が「System としてまとめあげる」というよりも、自然・自然科学における system の構造、自然科学における認識発展の論理を正しく抽出する形で「学習者の発見の過程として再構成」するのが「くみかえ」の本質的課題と考えられる。

工藤（2006）は、細谷（1976；1977；2001）を引用し、「“システムの観点”の重視」をル・バー修正研究の課題に挙げた。「システム」とは複数のルールや概念が互いに関連づいた知識の構造体とされ、細谷にとってル・バーの修正は2つの両立しないシステム（「誤ったルール・システム」と「ルール・システム」）どうしの交換だとされる。「両立しないシステム」とは何だろうか。また、ru は学習者の認識の成立に関わり、学習者の前提によって目標や内容は変わりうる。したがって工藤が言うように「教室で日々行われている学習に直結しうる教授理論を構築することを目指すのであれば、その理論構成に置いてシステムの視点は必須」である。単一のル・バー修正研究にこれが不足するとすれば、どのような研究上の制約や理論の不足によるか。「システムの観点の重視」とは何かを、教育実践の課題、教授学習心理学の対象・方法との関連で検討する必要があると思われる。

そこで本企画の第二として、細谷から直接学び、また極地研での活動を通じて、「単純なル・バー」をこえた対象、それに迫るための研究を展開してこられた工藤与志文先生に、教授学習心理学の課題と可能性についてお話をいただく。

以上をもとに、本学会を長く支え、精力的に研究を展開されてこられた進藤聡彦先生に、指定討論をお願いした。宇野・工藤両先生のお話をどう聴かれたかをお伺いしつつ、ときには我々参加者との仲介・媒介役になっていただき、両先生のお話をより深く聴きとりたい。